

放棄された世界で、貴
方を、

塵雪 椿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はじめまして。

坂本龍馬暗殺がなかったことにされた「放棄された世界」を正しに行く話。

ムツ中心、肥前くんメインです。

長編苦手な人間が書いているので、連載とはいえひとつひとつの話がめちゃくちゃ短いです。

初投稿です。温かい目で読んでください。

その他、独自設定でんこ盛り、about土佐弁などがあるので注意。大丈夫だよという方は、ぜひ読んでみてください。

誰得？俺得！

塵雪椿

目次

第1話

「もし歴史が変わってて、あの人が生きてたとしたら。……てめえ、会いに行くか？」

「何を言うとするんじや、いきなり」

陸奥守吉行は、言った相手を振り返る。

開いた障子に背を預けている肥前忠広の目は、こちらに向けられていない。

「政府から連絡があった。内容は、『明後日、放棄された世界を一時的に開く。行き先は慶応3年の京都、近江屋井口新助邸』。……だそうだ」

「……【近江屋事件】……」

勝手に口をついた言葉。すぐに口を閉じ、唇を噛みしめる。

「主にはもう話をつけてある。部隊編成は、おれに一任するってさ」

「今んところ、誰にする気なんじや？」

「おれを隊長に、てめえ、大包平、静形薙刀、御手杵、愛染国俊。てめえが行かねえなら、南泉一文字に頼むつもりだ」

「南海先生は？呼ばんのか？」

この本丸の主は出陣の際、部隊長の刀剣男士に部隊編成を頼む。そして肥前がその当

番になったときは、南海太郎朝尊と一緒に編成することが多い。ホンニンいわく、「本丸で悪さをしないようにするため」らしい。

「先生は今週、近侍だろ？だから部隊には入れなかった。水心子あたりに監視を任せる」
「確かに、水心子なら任されてくれそうじゃの」

不器用ながら大人ぶっている水心子正秀の姿を思い浮かべ、自然と笑みが零れる。しかし、すぐに大きなため息が聞こえて、笑みを引つ込めた。

「質問に答えやがれ。行くのか、行かねえのか」

いつも以上に不機嫌な様子に、「何をそんなにいらついちゆう」と返しながら、肥前が「あの人」と呼んだ、自分の前の主のことを思い浮かべる。

会いたいとか、と言われれば、そりゃあ、会いたいだろう。だが、行く時代のことを考えると……。いやでも、時間進行軍の身勝手である人の歴史を変えられたなんて、考えるだけで腹が立つ。そうなればやっぱり、行くしかない。

「行く。……久しぶりに、龍馬の姿が見たいきにゃあ」

葛藤を無理やり抑えていつものように調子よく答えると、肥前は初めてこちらを見る。

石榴石のようなふたつの目が、瞬きすることなくこちらを見ている。

「……………わかった」

長らく見つめ、口を開いてからもしつかり時間を使ったのちに、肥前は小さくうなずいた。

「出陣は明後日の早朝。明日の夜、任務の概要を説明するから、出陣部隊の連中に小広間に来るように言っておけ。いいな？」

立ち上がった肥前はこちらを見てそう言ったあと、障子を閉めて立ち去る。

「肥前の奴……なあんかおかしい気がするんじやが……」

気のせいならえいが。ん、気のせいじやろ。

思い込ませるように心の中で呟き、ふと、肥前が最後に言った言葉を思い返す。

「出陣部隊の連中に小広間に来るように言っておけ」
「つちやあ……わしがみんなを集めるんか？」

苦笑したのち、小さくため息が漏れた。